



七新藥上

十武
431
1



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



例言九則

一 或人予小語て曰く、輒今西國の醫學、日、新小
 月、又積み、新方新藥陸續として世に又出つ、世人
 其説の新奇なるに泥し、謾に之を募求して、其
 臧否を判つとせしむ、乱投胡措人を誤ると甚か
 うらひ、予何そ一書を著して、以て之を辨せさ
 るやと、嗚呼予、淺學薄聞なる、焉そ此任に當
 るとを得んや、然りと雖とも、客の謂ふ所の如
 きも、亦實小吾儕今日の急務なれば、苟も濟生
 に志あるもの、孰う能く之と等閑小看過をへ

き。因て自ら譏劣を揣らん。潜り小西國諸賢の論をる所を取て、之を朋百氏の説と質し。又加ふる小予り井蛙の見を以てし。参互聚撮して以て此書を著し。諒又此瑣々たる一小冊、文辞拙陋にして觀小供をる小豆らんと雖とも人々之と讀て自ら警め、功害を商量して新奇ふ溺るゝとなく。猶些も予り書の世間小裨補あらハ、則ち英明の電覽と瀆して、大方の一喙も充つることあるも、亦予り辞せざる所あり。一此書の原標とふを者ハ、悉く朋百氏の所説か

る。而して又引證ある者ハ、皆西國名家の書に係る。爰又其一二を擧げらハ、獨^{ドイツ}のウーストール^ンの藥物學、リクトルの藥説、レーマンの化學書、ワタ子ルの化學簡明、和蘭^{ホルラント}のコストルの重譯藥性論、フッセンの新藥説、ウ井ツトステーンの製煉書、キラルティンの化學高歩、トイリタトの化學韻府、英吉利^{イギリス}のペレラーの藥論初學、法蘭西^{フランス}のシヤンパン^ンの三有藥論、和蘭局方、瓜哇^{ジャバ}局方、英吉利局方、和蘭、英吉利および亞美利駕^{アメリカ}の新報紙等あり。而して此中又ウーストール^ン及ヒワタ

新藥 卷九 例言九則 二 尚新堂藏

子ルの所説多きと居る。是れ此二氏の共小朋
百氏の宗と見る所にして、其論説も又朋百氏
と同じけまかり。

一此書の既小上件諸名家の論説と聚掇する小
由て成る者なきに、其説を小必を其人の名と
標識をへとの理なきとも、一々之を爲さる
に、其繁雜を厭へにかり。然まとも其緊要の處
小至てに必之と舉ぐ。顧ふ小予り短識努才
よして、數般の論説と聚掇せしむかれに、真個
小彼是錯雜紛離して、前後の文理通暢せざる

處もあるへし。且つ予り腹中一滴の黒汁もな
けまに、行文拙陋にして往々讀む小堪へざる
の條も亦るへし。願くは諸方の君子、予り淺粗
と咎め、唯有益の事件を領會せし、濟生よ小
補かざるあらんして、予り攸拊之小過さるに
なす。

一書中往々予り層見と附くる所ありと雖も、別
小歎識して以て之を分さる。然まとも身師友
よ隨て周旋するの間、自ら聞見する所なきに、
皆是れ西國賢哲の規模小由る者にして、一も

孟浪杜撰不非也。覽者之を諒とせよ。
一方藥の名稱の如き。古昔ハ其性効不取り。或ハ其形狀等不由て名つけたまとも。輒今化學大不高尚して。百藥の成分悉く之を精細不分析し。以て新名と下者も亦尠かりらん。蓋し此名儀不由まハ。一見して其成分の何者たることを知るへし。今若し倉卒不之を用ひハ。從來傳習の久しき。或ハ疑惑と惹くんとを恐ると雖も。耳目漸く之不熟せハ。必そ諾汗の利益あらんとん。此書吐酒石と以て酒石酸礬銛と署する

う如きハ。亦此理不安んざるのを。覽者たまを以て予ハ銜奇とふんことかくんハ可なり。
一 規尼キニの如き。前脩の譯書。多くハ之を幾那塩と譯せり。今正之不從ふへし。然まとも幾那皮の滴塩一不して足らん。若し規尼と署する不幾那塩と以てせハ。他の聖革尼シニコニ。規餒實キイイ。咯垓コテ等の如き。又何と以て之を譯せんや。此書幾那塩の字を用ひて規尼と稱し。又莫非モルヒ珊多尼サントニ等も。別不譯字と撰ハさるハ。持り之ハ爲のこ。一 此書藥効と論するや。必そ先つ健康作用と舉

二 斤 藥 二 卷 別言 九 尚新堂藏

けて、後小醫治功用と論を、蓋し此両箇の名目
 へ、覽者の創見小係り、或ハ猜疑と致をとあら
 ん乎、然まとも此名目へ、輒今高尚の學術小由
 て起る所小して、之を用ひされハ藥性と説く
 と甚と難しと云、蓋し健康作用へ、藥劑と健康
 の人身小用ひて發する所の確然正切の作用
 と云ひ、醫治功用ハ疾痰の各異ふる小從て運
 爲の差等あると云ふ、學者先つ其意を得ハ則
 ち可からん。

一方藥の秤量の如きハ、正小 皇國の分兩を用

ふへし、然まとも西國の醫法、 皇國小入ること
 既小久しく、人々皆能く習て之ニ熟を、故小今
 簡畧小從てハ刃了了等の標字を用ふ、別意
 ある小あらん。

一時ハ皆 皇國の法小從て晝夜平分の十二時
 と用ひ、刻ハ西國の啓ミニット法小從て之を小時と
 署を、即ち 皇國の一時を百二十分一とするの
 一ふを。

例言九則終

七新藥 例言九則 四 醫藥學

七新藥總目次

例言

第一篇 解血變質之藥上

沃顛

第二篇 解血變質之藥中

硝酸銀

第三篇 解血變質之藥下

酒石酸礬鈣

第四篇 補血強神解熱之藥

規尼

第五篇 驅蟲滌腸之藥

珊多尼

第六篇 峻烈麻神鎮痙之藥

莫非

第七篇 緩和滋養解疎之藥

肝油

七新藥總目次終

七新藥上卷目次

第一篇

解血變質之藥止

沃顛

沃顛及ひ其の製劑一凡の功用利害

沃顛を用ふる小臨て一凡の規條

沃顛中毒一凡の救治法

沃顛各般の製劑

○第一純沃顛 ○第二沃顛耐 ○第三沃顛
○第一純沃顛 ○第四單純沃顛 沃顛頭 ○第五復沃顛 沃顛頭 ○

顛ハ希臘言ハ一と紫色を謂ふ。此物の霧氣。莖花
色あるを以て。英國の大儒デラ氏之に資て以て
名くと云ふ

沃顛ハ天下物と一と之を胎マまさるを名タトヒ。縦令
斯の如く廣濫ならざるも。之を求むるに必を其
蹤蹟と見らる。故に輒今の化學家ハ之を以て
萬物普通の成分とみせり。蓋し其現る、や單
一遊離の者か。多クハ海塩酸素コロリム。臭素ブロー
ム苦土元。塩金ユム等の諸元素と相合を。
之を胎むる最も多きものハ海産の動物植物。泉

源。温泉等あり。カチレ名の説ハ曰く。沃顛ハ大氣
の中ハ散佈して在り。呼吸由て肺に入ら所ハ
量ハ一日夜ありと十五分ハ四十五分ありと
沃顛ハ芒晶をなして色青黒。形恰も鉛墨の如く。
片々鱗状にして金屬の光輝あり。攝氏百七度の
熱ハ逢へハ溶流して紫色の霧氣を發し。之を放
冷せれば又小晶を結ひ。皮膚を染めて赭黄色と
か。植物の色を消褪し。電氣を導くハ水不溶し
難し。但酒精ハ能く溶解を。味澁黄よして氣。塩
酸の如し

沃顛の賣販小出つる者ハ大約水ヲ以テ之ヲ濕
シ其秤量ト重ウラシビ紙間ニ挿ンテ輕ク之
ト壓重トミ紙の濡濕トカを以テ其水あるヲ
知ラセシ又鉛墨赭石炭土酸化鎂等ヲ加ヘテ之
を質造トスル者あり其外貌の比較フテ半ハ之ヲ
察ス難シト雖モ若シ辨シ難ク逢クハ正メ之
ヲ酒精小溶シ試ムヘシ其品純カキハ全く溶解
シ他物ヲ含む者ハ否ラシ或ハ之ヲ焚クモ亦可
カス沃顛の紫霧蒸化トスルの後必キ其雜物ト遺
ト又食塩ト雜スル者ハ其よく水小溶解トカを

以て之と知る也

沃顛及ハ其製劑一凡の功用利害

第一 健康作用

沃顛の作用健康體上小現スル者ハ唯局發の
作用のみ克ク確切不變ト謂フ也凡發の作用
小至つてハ製劑の各異ナル小從フテ功用も亦
大ニ徑庭あり然キトモ其最も普通小シテ且つ
適切ナル者ハ大抵尤の如シ

以局部を刺戟シ甚シキハ之ヲ腐蝕シ皮膚小貼
シて嫩衝ヲ起シ漿液位滲出シ表皮脫離シ純沃

顛ハ兼て其部と赭黄ニ染じ、之と用ふるの部本
より醸膿せらる。若くハ粘液膜なきハ之と燦化
し黒痴を結成して分泌を減し其部と乾燥せし
む。沃顛の霧氣を用ふれハ眼、鼻及ハ呼吸器を刺
戟し、咳嗽若くハ氣管枝攣衝を起さ小至る。○沃
顛ハ其觸る、所の部位小抵つて水素と和合し
て水素沃顛酸となり。土質、金質及ハ蛋白質と相
結合して以て其功を發せ

呂沃顛及ハ其製劑之と小量 即ち醫みて内服す
藥の量 故ハ通例重切の證狀を發せふと行し、故ハ消食

の運爲、障碍を生せも、胃腸の輕刺戟して食氣却
て進み、脈少しく數となり、汗尿の分泌稍増進し、
月經の來至と早め、少しく頭痛し夜中動もをま
ハ眠り易ららば、上圍の機或ハ増減する有と
雖とも、是き又必然と云ふハ非也、唯常發の症と
る可き者ハ之を用ふるの時、若し腺腫の存を
る阿基ハ、其腫次第小減少し遂ニ消散せふ小至
る
波 小量を用ふるに長久あるも、若くハ其人各別
小嫌忌あるハ、則ち中毒の症狀を發せ、蓋し其症

うふや。消食の運営障害を受け、食機喪亡し、患者
食道及び胃部に當て一種^{ウレサキ}暗たる疼痛を覺へ、
下利痲痛を兼ね、流涎し、身軀削瘦を、是れ皆第一
道の劇刺戟に由る者あり、其他腦背髓及び其神
經より發する所の症に、悶煩、心悸、頭痛、眩暈、視聽
變常等なる、是等の諸症其初の皆感冒の症の如
し、故に此時速に後服を止むまに、更に危篤に至
るとか、若し又梅毒の劇症の如き止むとを得
るして、之を持長をまに上件の諸症を發するの
外、手足の戰栗を發し、遂に搐掣を致し、時として

の表皮赭色に變じ、或は發疹を得る者あり、然れ
とも此中毒の諸症は唯内用によるのみからん、
沃顛と外用とを亦然り、以て他の鑛類諸藥は
異なるを見るを

〔二〕一頓に大量以上と服をまに、急性中毒の症を
發し、腸胃焮衝し、吐下度かく疼痛甚しく、心悸、戰
栗、苦悶、呼吸困難、神力虚脱して、遂に斃る、然ると
も製劑の品眞實あり、各人の質好惡あり、一定し
て之を論ずるに能はん、リコール^{一人}、一人は沃顛耐
三了と與へて少害なく、マーシャル^{一人}、一人は沃顛

耐と静脈に注射して此症を發せすと云へり。中毒の死後屍を解て之を驗をまへ。胃腸に嫩衝充血の痕跡。歴然として見らへく。粘液膜張厚し。或ハ又軟柔とを々處々剥脱し。或ハ小潰瘍を生し。純沃顛或ハ其耐の毒に中る者ハ。胃の粘液膜處々深黄色の班痕を見らへん。

第二 醫治功用

沃顛ハコインデ氏初めて。之を醫藥に用ひしより。以來其稱大に貴く其用大に廣り。世界之を用ひらるの國なく。醫家之を用ひらるの病かき小

至り。實に病津の寶篋。醫家の金丹とらまはる。二十年前ハ一年用ふ所の量僅に五比許なり。今ハ至つてハ一年より。大約其量百比と費をに至らる。以て其用の廣きとを見らる。醫藥として沃顛を用ふるの標的左の如し。

以蛋白質の滲出及び之より發する諸病。諭へり。頸下腺。胸腺。乳房。子宮。睪丸。卵巢。肝。脾。攝護腺。鼠蹊腺等。其他水脈腺の硬結。腫脹。厚大に効あり。殊に頸下腺の腫大に在てハ。其効實に百發百中と云ふに。然るとも其腫大。他の原因より由て來る者

ハ否らも蓋し沃顛ハ蛋白質の滲出或ハ硬結と
解くものふして他の癌毒結節腫毒の如きハ更
小其功るし故之と精察せしめて亂投せし却
て中毒の害を招く事あらん須く小心す
〔呂〕腸間膜腺水尿管腺表皮骨關節等の瘰癧性諸
病尙痿病肺勞脂肪腫等ハ効あり○瘰癧性の諸
病不在てハ沃顛ハ實ハ峻有力の一薬なり故ハ
頸腺の瘰癧及ハ同性の内外結膜焮衝爛強風腺
の硬結腫ハ大効あり然まとも骨及ハ骨膜の諸
病腐骨疽白腫等ハ其功稍少し且つ之を用ふ

るも病者闇室ハ居り大氣の通暢宜しうらん食
養不善まきハ沃顛更ニ効るしとも昔人沃顛を
瘰癧腫ハ用ふるハ許多の禁忌を擧げて患者胸
病あり知覺機亢進し下肢充血の模様あり胃痛
の癖あり甚しく衰弱する者等ハ決して之を
用ふをうらんと謂へり然まとも謹慎して之を
用ふまハ可なりとも肺勞の如きハ只其初起ニ
効あり病既ハ全成するハ至りてハ却て害あり
アシダラル及ハゴバスナル共名ハ之ハ沃顛鏡を用
ひ又輓今ハ至りてハボルハ沃顛醃を用ひて

七新薬 止巻 沃顛 二 尚新堂藏

共ニ其効あると稱也

司馬子曰く内外結膜焮衝ハ世間ハ多く在る所の病ふして漢醫者流こまを爛弦風と謂ふ是を眼球結膜及ハ眼瞼結膜の慢性特質焮衝かり先天の惡液瘰癧梅毒等ハ因て起る小兒ハ發する者ハ多くハ父母の遺毒ハ因り大人ハ起る者ハ殊ハ瘰癧梅毒ニ毒の合併又由る古來人々殫思焦慮して其治術と議をとな雖とも一毛之と全治するの良法を得し者ハ他ハ只局処の治術と用ひて沈發の病患と治

せされハなり是故ハ局処ハ收斂の治方を用ひて一旦治せし如くおまとも數日ふして復發し終身斯の如くふして世ハ良醫なく天に良藥なきを嗟き恍々として一生を枉了する者又幾何そや嘗ハ寒郷僻里のみならん大邑名都と通して皆然り豈嘆を危きの至りからそや蓋し此病ハ沃顛大効あり是を其克く瘰癧梅毒等の其因とふる者と尅治するの力偉まきハなり人々此説ハ體して之を内服又試用して可なり其外用諸藥の如きは予正

二著こは所あらんとを

〔波〕纖維様若くは漿液様の炊衝胸腺間小漿液滲出せる者。急性頭水腫。義膜咽喉炊衝の遺病として發せる諸部の腫脹。硬結等。骨骨膜。齦膜炊衝の梅毒或は水銀毒に由る者。皮水腫。腹水腫。結膜粘液漏。麻疹。直腸粘液漏。直腸及び陰具の潰瘍及び厚大。諸般の皮膚病等小沃顛功あり。蓋し此等の諸病小沃顛の効ある所以は。漿液の滲出を妨げ。既小其滲出せる者之を解散せしむる小在り。又月經不順の症小は。鍊劑或は強壯劑を加へ用

ひて効あり。然まとも其症只惡液浸潤小因する者のみ小して他症は否らば。○沃顛の痛風及び風濕毒小効あるは。マーヤンダー及びクレッフエ二氏の共ニ褒稱する所小して。朋百氏も亦此説小尤祖を。予屢之を經驗する小其効良善小して。實小神祐あらう如し

司馬子曰く沃顛は総て皮膚病小効ありと雖とも。其硬結。腫大等を兼ねる者又在てハ。勲を策するに最も偉かりと云

〔仁〕血液調化不良及び之より發せる諸病。新舊二

新藥 七卷 沃顛 九 尚新堂藏

性の梅毒殊ふ其瘰癧質の人と發せざる者、及び之
ふ起因せる粘液膜、腺、皮膚、骨膜、虹彩、鼠蹊腺等の
疾患、瀉劑と連用する者、瀉劑の連用ふ由て患者
毒の風濕毒と兼ねる者、瀉劑の連用ふ由て患者
の血質不良とかり、所謂水銀病を發せざる者、流涎
の瀉劑瞑眩ふ由る者、尋常の梅毒高年衰弱の人
ふ發せざる者、及び其他梅毒の所患部分の滲出、腫
脹、厚大、硬結等と兼ねるものも大ふ効あり、又血液
關節ふ灌漑し漿液其間ふ澀溜する者、風濕毒性
關節焮衝及び其慢性の者、人多く稱用は

〔保〕慢性の神經病諸症、即ち神經痛、痙攣、麻痺、不遂、
癲癇、舞蹈病、喘息、耳聾、鉛毒と由る麻痺及び間歇
熱の脾部腫大と兼ねる者、ふ効あり、然まとも其確
切あらん、而して其功あるの理、未と講明をへり
らむと云るなり

司馬子曰く夫れ神經の諸病、焮衝、損傷等を
除くの外へ、之と只其機能の障碍と歸して、以
て器質と些の變化なくして發せざる所の病と
るを、今古皆然り、然まとも凡そ百物其有
機と無機とふ論なく、器質と損害あるとなく

して其機能と變化するの理あらんや。是れ神経
不必と損害ありと雖とも、眼之を視るるにあ
るは、尚且つ從來瞻視を輔るの器鏡顯微未と十
分の精微と得るる能はざるあん。故に沃顛の
神経諸症に効ある所以も、亦只滲出血流等と
射治するに在るのみ。決して他の機力あるに
非るとは

邊 解毒劑としてトン子トニ及びブカルデ共名ハス
テリキニ子ブルシ子「フェラトリ子」等植物毒塩の
中毒に用ひて大に其効を稱せり。然まとも沃顛

の解毒の功に到て、其經驗未と適切からず疑
ふ所多しといふ

外用に沃顛を用ふるの標的は、大率上件の如く、
而して又能く内外並用をヲハシと雖とも、時として
外用を以て主とあるとあり、故に別論を論せ
ざることを得る

登 局処の充血、慢性焮衝、及び之より發する諸病、
諭へ、硬結、厚大、腫脹、潰瘍等、諸般の皮膚病、即ち
結囊腫、梅毒性痒瘡、蜜瘡、斑點、疥癬、鱗屑状腫、癬癩、
秃瘡、疥癩、火傷、癰疽等、眼瞼、咽喉、及び鞞帶焮衝、潰

瘍。癰腫。殊小舌疳。白膜翳。腐骨疽。白腫。諸般の粘液
漏。眼淋。痲疾。腔痲。血尿。赤痢。腸間膜腺。甲状腺。胸腺
の腫脹。厚太。子宮及ひ胸腺の腺様腫等。沃顛を
外用して良功あり

知漿液の滲出。殊小其關節間。於ける者。陰囊。膜
膜の水腫。腹水腫。龜頭包皮の粘液腫。膝蓋腫。腹腺
の水腫。流注腫。瘰癧。使毒腫等。沃顛を外用して
効あり。蓋し此際。沃顛を用ふる。其部。新炊
衝と起し。以て互に癒着せしめ。或は之を兼攝せ
る病状と剋治と。小在り

外用。沃顛を用ふる。純沃顛を浴湯とし。或は
其耐と射注し。或は沃顛を水に溶して。射注。含
嗽。洗滌の諸劑となし。良とん。又好んて之を膏
油。小和して。擦劑となし。者あり。蓋し其宜しき小
從て可かり

沃顛。之を溶劑として用ひさるも。胃小入るの
後。其中。小含有せる所の水液の扶助。由て。其蛋
白質。を溶解して。速小沃顛水素。小化し。他の分泌
排泄の諸器械。腎。肺。表皮等より。再ひ躰中と出去
る者あり。マルチル。及ひカルピ。共名。唯四分。小

の沃顛と用ふるの後、三十小時と經て尿中速
 小沃顛の氣あると見ると云ひ、血液及び蛋白質
 質の成分沃顛小由て什麼の變革を受るや、方今
 未と詳明を得ると雖とも、血漿液乳及び蛋白質
 の諸液と溶解し、其として凝固の性を失くし、
 其の作用あること、從前諸賢の著述小由て之と
 知ることと得たり

第三 沃顛と用ふるらるるの症

既小上又論をふる如く、沃顛の其功廣くと雖と
 も、已小功あまひ又害あるきと能く、若し其當否

と商量せしめて、之と亂投胡措をまひ其害も亦
 太甚し、故小醫家之と用ふる小臨んて、病症と商
 確せんことを要す、今其沃顛と禁をるるの症を舉
 げて、以て醫家の注目小充つ即ち

以 胃、腸、肺、心等総て貴重の器具小、刺戟、激衝及ひ
 知覺機亢進等の症ある者、下利及ひ熱ある者小
 へ、沃顛と用ふるらる

以 知覺機甚とく亢進をる者及ひ其癖ある者、
 殊小胸腹諸臓の知覺機亢進と兼ねる者へ、之と
 用ふるを禁む、若し注意せしめて慢小之と投む

七
れハ、患者其刺戟不堪るを能く以て動もす
れハ危劇の症状。下痢。疝痛。心動。苦悶。煩燥。戰栗。熱。
呼吸困苦等と起る

波患者甚しく衰弱する者ハ、之を用ふるに
必し若し止むるを得るに之を用ふるに
必し小心注意を要す

沃顛を用ふるに臨て一凡の規條

沃顛及び其製劑ハ、之を内用し或ハ之を外用を
るに論なく。総て少く局処と刺戟し其功の達
るに及んでハ、全身の諸器殊に神経系統を刺

戦ふるに甚しく強し。故に之を用ふるに臨てハ、必
す少量を以て始め。漸々増加して大量に至るに
し。之を用ふるに長久からんと欲する時に殊に
然りとす。之を用ふるの間ハ時々間歇し。他の諸
劑を用ふるを良し。若し之を用ふるに甚しく久
くして、患者之を為し衰弱を致すとあるに、其
原病速く治し難し。然る時に強壯劑を用ひて患
者の精力を復す。其血質を良善し。而して後
復前劑を用ふるに。經久の梅毒。瘰癧毒等不於け
る殊に然りとす。○患者下痢。疝痛等の癖あり或

ハ其知覺機敏捷かる者ハ空心の時沃顛を用ふ
たりらば其飲膳度不適むるの後之を用ふるを
要む○機生の物品ハ沃顛を解析して其として
功かりらば澱粉の如きは殊不然り皇國人
の如き米麥蕪葛を以て其常食とみせハ之を回
避せらる難しと雖も上小記をる如き諸症
かくハ食後二三時を經て之を用ひ且其病症内
用と必須とせざる如きは之を外用すふと適
切なりとハ又沃顛を内用をる兼て食塩灰塩
の浴湯洗滌法等ハ必も之を行ふと要む是れ其

効として益強うらむまなり○其病能く沃
顛小由て治をたきと斷し而して之ハ沃顛を用
ひんと欲せハ其何様の製劑論かく総て單品
と用ふる切又他藥配をると要せハ蓋し沃
顛ハ機生及ハ無機生の諸物小遇ふて之ハ爲ハ
自家の本質を解析するれハかり殊ハ阿片莫非
莨菪馬前等ハ配用をまハ人沃顛の功と見ると
なく又此等の配伍物の績と収むるとふハ故又
沃顛の功を取らんと欲せば沃顛單品と清水
小溶解し用ふると最も良とす是れ沃顛ハ其

量の百分小沃顛七十分と含み、之と他の製劑小比をまへ、其含有する所の沃顛の量最も多く、其効も亦最も強く、殆んど諸製劑の最上等小位をまへなす

沃顛中毒一凡の救治法

大量の沃顛と一次と用ふるよ由て、中毒の諸症と發せらる者へ、速く其近圍とある所の諸水液、殊小其性緩和ある者と、大量と與へ其毒と稀釋して吐出し易うらしめ、直ち小吐根の吐劑を用ひて之と吐せしむる。就中消毒小適當の者ハ、米

麥、蔗、葛等澱粉と含む者の煮汁かり、沃顛鹹の毒小中る者へ、上件の水液と少許の塩酸或ハ硝酸を加へ與ると良とん、然まとも沃顛鹹の毒小中るハ甚と稀あり

司馬子曰く凡そ中毒の吐藥ハ、恒小必然有功の品と撰ふる。硫酸銅胆礬、硫酸亞鉛皓礬、吐根等皆其撰より、而して礦物の中毒小ハ、植性の吐藥と用ひ、植物の中毒小ハ、礦性の吐藥と用ふ。是を其性の相刻小資る爰小吐根と用ふるハ又此理のみ

沃顛の慢性中毒かる者ハ其證狀發せらば直ち
小方藥の内用と止め其劇易の度ニ應じて阿片
製劑緩和滋潤の品及び良善の食餌と與へ浴湯
と行ひ精力と保全一血質と復故せらる等諸般の
治術と行ふ也

沃顛各般の製劑

第一

純沃顛 イソダイユムピリユム

其化學上の性質ハ既ニ之と前ニ説上せり故ニ
爰ニ唯其用法と説くんとす

純沃顛ハ古來能く之を内服不用ふと雖とも輒
今ニ至てハ其褒賞全く止み唯外用ニ供せらるの
みあり之醫家一人も之を内用ニ用ふる者なし
他ニ一此品の味不佳にして氣も亦峻烈患者太
約之不堪ふる能はし而して沃顛嫌の如き良
善の製劑ありて以て其用ニ代まらざり
外用として動もそれハ之を霧氣とかし肺勞慢
性氣管支焮衝及び氣管支の粘液漏出入せし
むる者あり然るとも此法危殆にして或ハ險畏
の症狀と發するもあり寧用ひざるを以て勝

外用の膏薬として大小稱あり、以て前小説出せる所の諸患不用ふ

方

沃顛一分適宜の酒精を溶解する者

沃顛十分

家猪脂或ハ阿列布油二百分

右研合して以て軟膏とす

肝油の代用として、マルチヤル名ハ沃顛一分と扁桃油十五分至二十分を溶化し、之と瘰癧の患者

又與へて良功を得すと云ひ、而して之と書小筆せり、然まとも其理殊小疑ふべく價も亦從て落蕪は、別又此の如き劣方と処するると要せは、若し唯肝油の缺くる小逢ば、則ち之と試むるさのみ

瘰癧腫或ハ經久頑固の梅毒等ハ、沃顛軟膏を内皮法として用ふる者あり、蓋し此法の患者の體質沃顛の内用小堪へざる者小試用して可かり慢性眼焮衝ハ、沃顛を點眼水として用ひて功あり、然まとも沃顛と加ふるの善なる小如し

と云
方

純沃顛 一匁

沃顛 六匁

薔薇水 四匁

右精細小調勻し以て眼中小滴入を

沃顛と浴湯として用ふるべし。一了の純沃顛と食塩汁小溶解し全浴中と混し。患者として湯中不在ると半時若くは一時から一むると要し。是れ食塩は能く沃顛と溶解せむの効あまらざるなり。

又或いは之を代ふる小海水を以ては。湯の温度は甚しく熱からしむるをうらむ。唯冷煖人々適をると以て良とん

エーメル人名の純沃顛と灌腸劑として。赤痢小用

ひ大小其効と稱を即ち純沃顛及び沃顛 五匁至十匁と二匁至三匁の清水小和し日小一次宛之と腸小注ぎ。又厚腸の疾患及び窘迫痢等小。之と阿片液及び粘滑液小和し。硝酸銀小代用して効あると稱を。然るとも是れ又屢用ふべきの方小あらむ

第二

沃顛耐 ツリチス、イラス、テイ、アルコホリカの子

此方ハ沃顛と酒精小溶漬せる者にして、沃顛四十八ハ酒精一ウと以て之を製し、此液八滴中小沃顛一ハと含む、蓋し酒精ハ揮發輕稀なる故小尋常の諸液の如く、一滴と以て一ハとせざるあり、和蘭局方の方小従へり、一分の沃顛を十二分の酒精小溶漬して以て之を製し、此液一ウ中又沃顛四十ハと含む者とす、此方ハ内用又供して、良方とすへうらんと雖

とも古人既又之と内服不用ひ、輒今又之を用ふる者あり、其法五滴より十滴まで糖水或ハ良好酒小和して、一日二三次又之を用ひ漸く其量を加ふ、然きとも之と糖水小和するの方ハ予之と良とせし、英國局方小従へり八分の沃顛耐小二分の沃顛耐と加へ用ふ、蓋し此法を勝きりとん但沃顛耐ハ胃小入て解析さふ、を極めて早く、加之光線小當て速又其功を失ふり故又、用小臨シカクナラスんで必し新ふ之と製せんを要し、沃顛耐ハ外用して大効あり、其用沃顛耐硝酸銀の

如し而して峻刺戟腐蝕及び分解消散の効の沃
顛小存する者ハ皆此方小發也。故又之と潰瘍の
贅肉其荒蕪甚しき者。癌毒様の腫瘍。疣瘻毛髮脱
落禿瘡瘰癧腫眼焮衝の粘液漏と兼ぬる者。丹毒
様腫。皮下組織の蔓延焮衝。焮衝將又脱疽小陥ら
んとする者。病院脱疽。母班。標疽。破胭瘻瘡。白帶下
等の諸症小用ひ。須効の強弱と議して沃顛と加
減と。○人此耐一二多と沃顛。及ひ食塩小和し
て。之と浴湯中又注さ。以て全身浴とふ。人者あり
其蒸氣。肺鼻と刺戟して。甚と病又佳からず用ひ

さると良と。○總て患部と刺戟するに極めて
太甚しく。遂又之と荒蕪消散せんと欲するの地
小臨てハ此耐の功少して弱小唯患部と多少刺
戟し。以て之と變調せんと欲する時のみ。此耐と
用ふるに要す。通常毛筆と以て之と塗擦し。其上
小此耐と浸す所の厚紙若くハ片布と置くと良
と。是き其功と強めん。爲かり
ヒヲリキ。ト人名等の諸人ハ。肺勞家の胸上小
此耐と塗上し。或ハ冒寒風濕毒痛風等小之と皮
表小塗擦して誘導寛解の効と稱し。コロス及ひ

ヘルト人名ハ慢性の關節疼痛及ハ風濕毒不之
と布帛人名不蘸して患部を包纏して効有り云ハ
ベニト人名ハ此耐を蘸す所の布片を以て痘児の
顔面を掩ひ其起脹を障け且つ之を速小乾壓せ
しめ以て醜痕を防くと謂へり此等の諸法の如
きハ頗る新奇又渉ると雖とも又之を試みて害
あるの理あり

第三

沃顛鱗 イソチウム、カリキム、イソドカリウム、
○カリウム、イソダラム、カリ、ヒドロイ、
イソチウム、ホッター、イソチウム、ヒドロイ、
ポッター、ヒドロイ、デチウム、カリキム

沃度剝篤亞斯の沃顛水素酸鱗

沃顛鱗ハ雪白方形の晶塩あり。味鹹にして發
り、氣と見て變せし。然るとも氣太く濕冷をま
ハ少く濡流を。水及ハ酒精小容易小溶化し。其
溶水ハ復能く多量の純沃顛と溶解をへし。此品
ハ其用甚々廣き爲す。動もそれハ妓商の質製
小出つる者あり。克く之と辨識せんこと要し。純
眞の沃顛鱗と亮査するの法ハ即ち左の如し
以沃顛鱗の晶色ハ必を雪白かるへし。其他色と
雜ふると好しとせし。而して又灰塩の性あり可

らす(宮)之と焚けの純沃顛の如き霧氣と發と一
| (波)之と清水小溶して後。又硝酸銀と溶し沉澱
物と取り。初小清水終は礪砂精と以て之と洗ひ
其乾固をろと待て。之と秤まの十分の沃顛の
十四分の沃顛銀と造るへ(仁)醋酸或は塩酸と
加へて之と和勻をるも。沸騰せず又泡起せを其
質な者か否らに
沃顛の性功の既小上小之と一凡小論せり。醫
藥として之と用ふまへ。其功實小百藥小卓越し。
他の諸製劑一も之と代ふる者か。此品の藥

局小列ふるは是き希世の鴻益なり
此藥一二了と一次小内服をまへ。通常炊衝漿液
滲出等の諸症と發して危險又至る。小獸小於て
ハ殊小然り一二爪と水小溶解して。之と犬の靜
脈中又注けハ。播撃と發して忽ち斃る○人又用
ひて害とるを所の分量ハ爰又揭示し難し。是れ
其製法異同あり。各人各種の性稟あり。三四爪と
用ひて疝痛嘔吐等あり。又二三了と服して更小
此患害ふき者あると以てかり。然まとも通常其
性淨新ふして。他物と會むとるけれハ。半了至一

了の量能く諸症と起さふ足る
内用ハ一日十片ト用ハ漸く増加して三十片
小至る。小児ハ一日三片より用ハ遂に十五片
到る。蓋し十片以下ハ之と用ふるも必須の効と
見ろと能とハ。又三十片以上ハ却て多量ハ過き
稍藥害あり。獨逸國の醫ウーストルレレ名人ハ克
く大量と用ふと雖とも。蓋し其製の不良ならん
とと疑へり。若し今之と大量ハ用ハて効と奏ナ
るも十分ならん。而して此の藥害なき時ハ則ち
其製の良らさると證し。或ハ他物ハ相遇て之り

爲ハ解析せらる。ハ由る朋百氏の用法ハ十片
と清水と溶解し一日數次ハ用ハ。各日ハ三片と
増加して三十片小至りて止め。十四日間毫も藥
液と與ふるとなく。大氣ハ逍遙し。身軀と運動し。
良善の食餌と用ハ。優遊和適して後。又十片と以
て始め三十片小至りて止め。十四日間休息して
後。始むると又初の如し。蓋し此藥ハ其初ハ甚々
功あり。長服をまハ其功稍減る。是れ患者の體力
藥力ハ勝てハかり。故ハ諸沃顛製劑皆之と間歇
し用ふるを以て最良法とを。又沃顛二片と清

水八分不溶化し。一日二食七と與へ遂不増し
て四食七に至り。既不其量一与と盡せし暫く後
服を止め其景況を見て又之と與ふへし是れ亦
朋百氏の用法なり。抑此兩用法の十全無害實不
適切の法不して。從來の諸用法不冠とすと云ふ
也。故不或ハ之と酒精不調し。或ハ之と芳香水
不和とる等の用法ありと雖とも皆用ふる不適
せと○沃顛藤の功用の甚と烈からしと雖とも
其効良善不して。瀕劑の如く減食を要せと冒寒
と恐るは。又流涎の憂ひからし。但大量と用ふまは。

時として頭重と覺へ。鼻嚏流涕等の症を發も。然
是とも服を止むれば。速不快復し患者復よく後
服不堪ふ○沃顛藤を梅毒不用ふるや。其症一旦
快治とるも。決して之を以て其全癒とををる
らと。尚數週間前方を持長して。患者の體質全く
復ふるに至るへし。否れば再發の憂ひあり。且つ
服用の前少頃時の決して穀粉類の食物と用ふ
るべからし。又兼て塩水浴と行ふへし大不其功を
扶く

司馬氏曰く沃顛藤の作用は。人々の性稟不從

て大小徑庭あり、醫家預め之に注意して、以て其用量と議せんことと要也。我友入澤松塢嘗て梅毒の極劇症、隣死の者、小沃顛と用ひ、其量一日小七十二分と盡らふ至て大効を収む。然きとも患者更小瞑眩の候なく、唯夜間少く盗汗せしのみと云へり。

外用として之を軟膏小製し、或は洗滌、浴湯の諸劑小製を、然きとも浴湯小純沃顛と以て優れり。とに、軟膏小一匁と半匁至一匁の脂膏小研和を、和蘭局方より従へり、尚之に炭酸苦土六分と

加ふ。是れ其解析と防ぐる爲なり。然きとも用ふ臨て新小之を製する。若くは溶劑を用ふるの解析する、とふさふ如り。其溶劑は、則ち一分と六分至二十分の清水小溶する者あり。

第四

單沃顛 ヒダラルギリム、ヒダラム、フラム、プロトヒダレム、ヒダラルギロム

是れ酒精と以て濡し、る生水銀と沃顛と共小、一盃小研和する由て成る所の青黄色の粉末にして、香味共なく水、酒精等小溶解せむ。唯沃顛の溶水小能く溶解し、大氣小逢て黒色に變し。

之と焚けの霧氣と發し、膏脂及び蛋白質等機生の物小遇へ、忽ち化して複沃顛瀝となふ。故小黒紙と包纏し、る瓶中小貯へ。用小臨て此等の品小配とると禁と

小量と用ふまゝ、更小較著の患害と見さ、大量と用ふまゝ、局処と刺戟し、胃腸の焮衝と起と、峻解凝變質の功あり、恰も緩製瀝劑の如く長服して、甚しく身軀と害とるを、よく流涎と致とるを稀なり

醫藥として之と新舊二性の梅毒、殊も其經久小

一、瘰癧と兼ねる者、慢性腺腫、肝臟閉塞、瘰癧性白腫、關節水腫、慢性結節皮病、癬癩、癌毒様腫、疣瘻、顔面痛、梅毒性瘡癬、漿液腫、瘰癧腫、小用ひ、殊小軟膏として之と小兒の従前諸病と患ふる者、小外用して妙功あり

司馬子曰く、單沃顛瀝、之と水銀の製劑、小比とるふ、外瀝小遠くして甘瀝小近し、故又原發の新梅毒症、又ハ別小殊功あり、小非と、却て甘瀝と用ふるを良と、但、其人格別小嫌忌あり、て甘瀝と服とると得ざる者、或ハ其業務外

出と禁をへりらざる者小此薬と換用をへり
内用ハ四分ハ一至二ハと一日數次小用ハ或ハ
増して三ハ又至る丸若くハ散劑と良とハ配を
る小乳糖阿片癒瘡木羔等と以てす朋百氏の常
用方あり即ち左の如し

方

單沃顛瀕 十ハ

清淨阿片 四ハ

大黃末 一ハ

甘草末 適宜

新右研和六十九と作り朝夕一丸を服し各日
小一丸を加へ便秘を有る者ハ下劑と與へ灌腸
法を行ふ尋常の梅毒症ハ此丸百二十箇と盡
して太抵全治をへり
外用ハ一ハと一ハ至二ハの脂小研和し一日小
太抵十ハ至十五ハの量を用ふ而して其膏橙黄
色と見ると見ハ速小其用と停むへし是れ其中
小在る所の單沃顛瀕既小復沃顛瀕小變をるの
徴なり若し尚之と用ふれハ其刺戟の度極めて
峻劇ありて局処を荒蕪をる小至る

第五

復沃顛瀕

ヒダラルギリム、イラダ五ム、リュブルム
○デウトイラデレ五ム、ヒダラルギリム

真紅朱色の粉末にして香味共みなく、之と熱を
れ、其色橙黄不變を、水に溶解せば酒精及び沃
顛瀕、食塩苛性塩類、瀕属諸塩の溶水に能く溶
解を

此薬の局処と刺戟をとり、極めて峻烈にして動
心をまへ之と腐蝕し、胃み入て容易に嘔吐と起
し劇症と起す、其性功の猛烈あるを、大小前薬に
蓓蓓し、水銀製劑中并瀕正ふ之に當るへし、此薬

半々として一の脂に研和する者へ、其性稍緩かり
と雖とも、之を皮表に塗擦せれば能く錢癬状の
瘡疹を發す

此薬は外瀕の如き水銀の功の外に、尚劇しき沃
顛の効あり、故に前物の如く、之を梅毒瘰癧殊に
其二病合併の者に用ふと雖とも、其性功の劇烈
からう為に内用は供するを稀なり、唯外用とし
て梅毒性瘰癧性、及び諸般の皮膚病、頭瘡、癌毒様
腫、癬、腺腫、梅毒性瘰癧性、及び癌性の潰瘍、白腫、
關節炎、衝腐骨疽の初期、瘰癧家の骨腫、角膜暈闇、

眼瞼及び其腺の慢性焮衝。内外結膜焮衝。眼瞼腺の硬結。牛眼。及び風濕毒後遺を所の關節靨帶の硬結。小良功あり。

内用の溶劑と最も良とい。十六分ハ一至八分ハ一と酒精小溶し。一日數次。小反復して之を用ひ。漸々小増加して多量小至る。此時決して空心からしむるに勿ま。

方

復沃顛瀕 六分

酒精 六分

香竄阿芙蓉液 半分

右調和し一日小八滴より十滴と以て始め。漸次進て二十滴小至る。

外用ハ之と軟膏とを以て。即ち十分至二十分と一今の脂膏小研和し用ふ。又ホフマン人名ハ二分と二今の脂膏小和をると以て最良方と稱を。他ハ

患部の差異。須効の強弱。小從て。醫家の商量と異小をるとのみ。必を一方と確守せをして可かり。眼膏ハハ一分と蠟膏及び甘扁桃油各一分小和をると以て良かりとい。

第六

沃顛鐵

フェルリウム、イタダテウム、フェルリウム、ヒドロイ
トキシム、ラキシデラム、イタデレテム、フェ
ルリ、イタデテム、フェルリ、フェルロキウム、イタダ
テム、フェルロキウム

闇緑帯青色。晶體の塩なり。水及び酒精に溶き
こ最も易し。氣を見て濡流し且つ解析を味澁蒼
小して微鹹なり。沃顛の味と口中に遺を
沃顛鐵の強壯。解凝。變質の劑とに。鐵及び沃顛の
効あり。之を用ひて毛管の運爲を奨進し。大便を
増し利尿を進む。○大量を用ふると胃の粘液膜
を刺戟し。悪心。嘔吐。下利。胃脘痛を發し。尚其量と

大小をまゝに遂に胃腸の攸衝を起す。醫藥
醫藥として之を用ふるは。太抵患者衰弱して強
壯藥を用ふへとの症あり。而して兼て解凝變質
の効を要するの地小あり。故小之を左の諸患小
用ふ。即ち瘰癧性の腸間膜病。癌毒様腫。瘰癧性頭
瘡。及び諸腺の瘰癧性病。結節肺勞。及び其他の肺
勞。血液衰乏症。衰弱の患者の咯血。氣管支粘液漏
等を患ふる者。月經閉止。小歸因せる胃脘痛。白帶
下。月經閉止。殊小其腸間膜及び肺の結節腫と兼
る者。夢中遺精。經久蔓延の梅毒。慢性風濕毒の熱

と帯ひさる者等あり
外用として腔及び子宮の粘液漏及ひ痲疾等小
之と射注し。慢性梅毒性の潰瘍及ひ皮膚病小効
あり

此薬ハ諸般の物品小遇ふて其解析さるゝこと尤
も早き故小之と他薬小伍とへくらん。唯之と
内用せんと欲せハ二匁至六匁と取り糖水小和
して與ふへし。又之と丸劑として用ふるも可あり。
外用小ハ軟膏と佳とん。即ち半匁至一匁と半匁
至一匁の脂膏小和して用ふ。射注洗滌の諸劑とふ

を小ハ半匁至一匁と取り八匁至十二匁の水小
和とへし。古來諸家此薬の解析と防ぐの法と講
をと雖とも。一も其効ある者ふし。故小内外共小
用小臨て。新小之と製せんことを要を

第七

沃顛金 ヲウリム、イラダテムのイラデュレテム。

黄緑色の粉末ふり。香臭共小なく。大氣小遇て解
析せらま水と溶し難し

第八

沃顛銀 アルゲンテム、イラダテムのイラデュレテム。

白色帶黄の粉末なり。諸液小溶解せし

第九

沃顛鉛 プルムビユム、ヒドロイラヂイキユム、イラダレ

金黄色六面の方晶なり。光澤あり。温湯及ひ酒
精小克く溶解し冷水小溶解せし

第十

沃顛亞鉛 シンキユム、イラダレム、イラヂレム

白色の粉末なり。氣と見て速小流化し諸液小容
易小溶化せし

第十一

沃顛砒 ダアルセルニキユム、イラダレム、ヒドロイラ
鱗状赭色の小片屑なり。香臭共なく。水小溶解
せし

第十二

沃顛銻 アンチモニイ

闇赤色の沉降物なり。冷水及ひ温湯小由て解析
せらる

第十三

沃顛重土 バリタイユム、イラダレム、バリタ、ヒド

白色精微の細針なり。氣と見て流化し冷水小容

易に溶化し不快にして嘔と發をへこの味あり

第十四

沃顛石灰土 ヒドロイラダス、カルカリエ〇カル
カリア、ヒドロイラダイカ

白色苦味の粉末なり。氣を見て流化し冷水小容
易に溶化を

第十五

沃顛硫黄 シユルフル、イラダラム〇イラダレラム、
シユルリス

灰白闇黒色晶體の粉末なり。冷水、酒精及び温熱
小由て解析せらる

第十六

沃顛曹達 ナトリウム、ヒドロイラダイキウム〇ナトリウム、
イラダラム〇ヒドロイラダス、ソーデエ

六面方形の晶塩なり。氣を見て流化し冷水及び
酒精小容易に溶化を。其製其効全く沃顛鹹小相
類を。然きとも人之を用ふる者あり

第十七

沃顛揮發塩 ヒドロイラダス、アムモニエ〇イラデユ
レラム、アムモニイ

白色晶形の粉塩なり。氣を見て流化し容易に冷
水に溶解を。香臭共なく。味鹹酸にして沃顛の
氣あり

第十八

沃顛と解析するの最品なり。其結合豈功と奏はるの理あらんや。今人々と諸病不用ふる者あり笑ふへこの甚ききなり

以上列擧をふ所の沃顛其の製劑十六品の。或は其奇効と稱する者ありと雖とも。要する小小異大同の品にして。功害未分の品も亦之かき小非を。別小撰擧する小足らんとを。夫れ世間新と翫い奇と好むの癖。人々皆これあつた當時尚然り。況や後世小至る小及てとや。若し若干の新藥之小加ふるにあらん。正小之と如何せんや。本より是

れ學と好み道と廣むるの好志小由て生ずる所なりと雖とも。其弊又これ小添とさることを得ん。縱令今予口吻と酸了して。嚴しく之と論ずるも。後世新奇増乘するの時小當て。克く誰う之と遇めん。噫朋百氏の言小曰く。輓今化學の進歩蓋其高尚と極め。徒ら小苦心患思して。斯の如き無裨の劑藥と創製し。以て人の耳目と新し。後進として取捨する小地かりらむ。蓋し此般の劑藥ハ之と一擔ふして。以て河濱小捨て可なり。而して後肇めて醫道の真面目と見るべきなりと。盛

七新藥上卷 其真味と知るところあらん 其真味と知るところあらん 其真味と知るところあらん

其真味と知るところあらん 其真味と知るところあらん 其真味と知るところあらん

七新藥上卷 畢

